

キリスト教保育

卷頭言
新しい保育様式で
大切にしたいこと
松井剛太

礼拝のお話
ペーパーサーントを使って
菊野秀樹

年主題
共に喜んで
～すべての歩みの中～

祈りのために
田口美穂



2021 SEP

9

弟子たちは言った、「わたしたちはここに、パン五つと魚二ひきしか持っていません」。イエスは言われた、「それをここに持ってきてなさい」

口語訳聖書・マタイによる福音書14章17～18

今月の聖句で注目して頂きたいと思うのは、この物語の小さな部分です。

弟子たちは、主イエスに報告する時に、「……しか持っていません」と言いました。しかし、主はそれを「手に取り」「祝福して」、大勢にお分ちになりました。ヨハネによる福音書の同じ記事（6章1～14）では、パンと魚は、そこに居合せた小さな子どもが、みんなにあげてほしいと言って差し出したことになっています。五千人の人に足りるかどうかは、子どもにはわかりません。しかし、自分のパンと魚を食べてもらいたいという子どもの信仰と愛に、主は目を留められました。

弟子たちは、計算とその結果に心を奪われ、「……しかありません」と言いました。しかし、主はその僅かなものを取り上げ「祝福」なさいました。そこには大きな開きがあります。私たちが、このように自分の人生を見たり、子どもの教育を考えたりするようになるならば、どんなに素晴らしいことでしょう。

「この子は、こんなことしかできない」と日に一回ずつ言えば、本当にそんなことしかできない子どもになってしまうでしょう。しかし、「この子は、こんなこともできるようになった」と喜べば、「こんなこともできるようになったんだ」と思うようになるでしょう。

人のとらえ方、視点が問題なのです。「こんなこともできるようになったんだ」と見てもらった子どもは、おそらく、この時の感動を生涯忘れることができないでしょう。教育というものは、このようなところに、目を留めることによって成り立つものだと思うのです。

子どもに良いもの、優れたものがないのではないのです。それを「みつける」ことの貧しさが、教育を貧しくしています。子どものだめな面ばかりが気になりがちです。子どもは、日ごとに「自分」を花開かせています。それを「みつける」ことに保育者の喜びがあります。

子どもの成長には目を見張るものがあります。遊びも交流も大きく、豊かになってきました。この豊かなものに目を留めることのできる保育者は幸いです。

岡本不二夫・執筆 当時・日本キリスト教団平塚教会牧師 附属平塚二葉幼稚園園長
1986年『キリスト教保育』誌9月号より

キリスト教保育

第630号9月号



年主題

共に喜んで

～すべての歩みの中～

実践からの学び 富田恵美子
祈りのために 田口美穂

40 34 32 31 30 24 22 21

【カリキュラム】
教保育指針
つて(2) 松浦浩樹
くれること(2)
・お話 後宮 敬爾

虫が教えてくれること(2) 山崎

『キリスト教保育指針』 改訂にあたつて(2) 松浦浩樹

新しい保育様式で
大切にしたいこと

〈連載〉 保育者する人々への
12のエール 石丸 昌彦

目福 口福 耳福 中野富美子
連盟だより／編集子 佐渡いずみ
風 長山篤子 丸拌のお話 菊野秀樹

63 62 49 48 44 42 41

表紙絵 田中楳子
カット 長野祥三 長縄えいこ
中畠治子 松成真理子
金井ユリ

